

# 例　　言

- 1 本書は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所が2006年度におこなった調査研究の報告である。
- 2 本書は、I 研究報告、II 飛鳥・藤原宮跡等の調査概要、III 平城宮跡等の調査概要、の3部構成である。II・IIIは都城発掘調査部がおこなった発掘調査の報告であり、Iにはそれを除く各種の調査研究報告を収録した。調査次数は、IIが飛鳥藤原の次数、IIIが平城の次数を示す。2007年1月以降に開始した発掘調査については、本書では略報にとどめ、正式な報告は『紀要2008』に掲載する予定である。
- 3 執筆者名は、各節または各項の末尾に明記した。発掘調査の報告は、原則的に調査担当者が執筆にあたり、遺物については各整理室の協力を得た。
- 4 当研究所の過去の刊行物については、以下の例のように略称を用いている。

『奈良文化財研究所紀要2001』	→『紀要2001』
『奈良国立文化財研究所年報2000－I』	→『年報2000－I』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV』	→『藤原報告IV』
『平城宮発掘調査報告IX』	→『平城報告IX』
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』	→『藤原概報26』
『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』	→『1995平城概報』
『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報14』	→『藤原木簡概報14』
『平城宮発掘調査出土木簡概報35』	→『平城木簡概報35』
- 5 本書で用いた座標値は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海拔高であらわす。2002年4月1日からの改正測量法の施行にともなって、当研究所の発掘調査も日本測地系から世界測地系へと移行することとしたが、実施にさいしては1年間の準備期間を設けて基準点の改測・改算作業をおこない、座標の変位量を算出した。世界測地系への全面的移行は2003年4月である。なお、標高に関しては、2000年度平均成果に基づく改訂にしたがうが、実質上大きな変化はない。飛鳥藤原地域では、橿原市・明日香村・桜井市にまたがる55の3級基準点（一部2級基準点）で座標変位量を算出した。両測地系の差（世界測地系座標値－日本測地系座標値）は、平均して南北方向（X座標）が+346.52m、東西方向（Y座標）が-261.57mである。ばらつきを示す標準偏差は、それぞれ0.031m、0.023mと小さい。したがって、飛鳥藤原地域では、X座標で+346.5m、Y座標で-261.6mを両測地系間の座標変位量と認めた。つまり、実用上、日本測地系の座標を世界測地系に変換するためには、上記の数値を日本測地系の座標値にそれぞれ加えればよい（ともにマイナスの数値のため、Xの絶対値は減少し、Yの絶対値は増加する）。一方、平城地域では、奈良市の平城宮跡内で、22の3級基準点（一部1級基準点）の座標変位量を算出した。両測地系の差は、平均すると、南北方向（X座標）が+346.40m、東西方向（Y座標）が-261.28m、標準偏差はそれぞれ0.012m、0.009mと僅少である。よって、平城地域では、X座標で+346.4m、Y座標で-261.3mを両測地系間の座標変位量と認めた。上記以外の地域では、当研究所が設置した基準点がなく、改測・改算作業をおこなっていない。詳細は『紀要2005』22～23頁参照。

- 6 発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組合せにより表記する。  
SA (塀・柵)、SB (建物)、SC (回廊)、SD (溝)、SE (井戸)、SF (道路)、SG (池)、SH (広場)、  
SK (土坑)、SS (足場)、SY (窯)、SX (その他)
- 7 藤原宮内の地区区分については、『藤原概報26』(1996・3頁)を参照されたい。
- 8 藤原京の京域は、岸俊男の12条×8坊説（1坊=4町=約265m四方）を越えて広がることが判明している。南北の京極は未確定であるが、東西京極の確認をうけて、本書では10条×10坊（1坊=16町=約530m四方）の京域を模式的に示した。ただし、混乱を避けるため、条坊呼称はこれまでどおり、便宜的に岸説とその延長呼称を用いている。
- 9 7世紀および藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥I～Vとあらわす。詳細については、『藤原報告II』(1978・92～100頁)を参照されたい。
- 10 平城宮出土軒瓦・土器の編年は、以下のようにあらわす（括弧内は西暦による略年式）。  
軒瓦：第I期（708～721）、第II期（721～745）、第III期（745～757）、第IV期（757～770）、  
第V期（770～784）  
土器：平城宮土器I（710）、II（720）、III（740）、IV（760）、V（780）、VI（800）、VII（825）
- 11 本書の編集は、I吉川聰、II豊島直博、III神野恵が分担しておこなった。巻頭図版および中扉のデザインは中村一郎が担当した。また、英文目次については、ウォルター・エドワーズ天理大学教授の校閲を受けた。